

「底が突き抜けた」時代の歩き方 500

時間とはなにか - 時間の発明によって誕生した「自分」

「定時運行」列車内で私たちは、それぞれ自分の時間を過ごしている。次の予定のことを考えて、列車が時間通りに運行することを信じながら、乗客は列車内でさまざまな自分の時間に耽^{ふけ}っている。眠ったり、窓の外を眺めたり、読書したり、考えごとをしたり、携帯にメールを打ち込んでいる。話に夢中になっている者もいる。いずれであれ、列車が走っている時間は自分の外にある。自分が過ごしている時間が列車によって運ばれている状態にある。では、職場で働いている勤務時間のなかでも私たちは自分の時間を過ごしているのだろうか。いや、職場の勤務時間は、自分が過ごすそれぞれの時間が労働時間にとって代わることによって成り立っている。つまり、自分の時間が労働時間として売られている。給料とはしたがって、その対価にほかならない。自分の時間が売られることは、もちろん奪われることである。奪われるほどに値する自分の時間であるかどうかは別にして。

職場の勤務時間のなかで私は自分の時間を失っているが、列車が走っている時間のなかでは私たちは自分の時間を過ごしている。しかし、走行が突然乱れて、自分が過ごしている時間も突然断たれてしまうことが起こりうる。列車事故である。列車が走っている時間の流れが寸断されて、列車に運ばれていた自分の時間も一緒に寸断されるのだ。自分が過ごしている時間の寸断が一時的ではなく、永久であったなら、人は自分の時間を死ぬ。死ぬとは、自分の時間を永久に取り戻せなくなる状態のことである。列車の運行している時間の突然の停止状態が、暴力的に個人の時間に押し込まれる事態が人身事故であり、個人の時間が完全に寸断されたとき、人に死が訪れる。個人の時間の秩序が崩壊に見舞われて、カオス（混沌）に陥ってしまうのだ。人は誰でも自分の時間の喪失のなかで死ぬが、では一体、時間とはなにか。

時間の発明

ここでは評論家の岸田秀の説を紹介する。彼によれば、人間が後悔するようになったとき、つまり、人間が後悔することを覚えたとき、時間は生まれた。すなわち、発明された。本能が壊れている人間は、さまざまに失敗してきたことを後悔するようになり、後悔に引きずられて失敗したことを気にしはじめると、その時を過去と名づけた。失敗したことの修復を願い、それが可能となる時を未来と名づけ、過去から今（現在）を経て未来へと流れる線を時間と呼んだ。この時間が人間の自我の住家、仮の宿になった。本能が壊れている人間は本能を基準として行動を決めたり、世界のなかで生きてゆくことが

できないので、本能に代わる行動基準として自我を発明し、男や女、親や子といった自我の属性に基づいて行動を決めていった。いうまでもなく自我とは幻想であり、どこにも拠り所がないので、過去から未来へと流れる時間のなかに住家を求めたのである。要するに、自我は過去での失敗を未来において埋め合わせる一貫した主体、時間の主人となったのだ。

しかし、自我が時間のなかに住むようになると、自我に始めと終わりが訪れてくることになる。自我に初めがあると思うようになったとき、自我の初めの以前のことが当然気になり始める。そこで先祖が創り出される。好奇心はひろがり、日本人という属性に基づいて、日本人はどこからやってきたのか、更に人類はどこからやってきたのか、へと遡っていく。関心はとどまるところを知らない。地球はどうしてできたのか、宇宙には始まりがあるのか、という疑問をますます募らせて、自我は果てしない過去に巻き込まれていく。

どこからやってきたのか、が気になることは、どこへ行くのか、が気になることである。自我に初めがあって終わりがあるなら、終わった自我はどうなるのか。人間に死の恐怖が、このとき訪れる。時間を発明したとき、人間は死の恐怖を味わうことになったのだ。時間をまだ知らない動物はだから、死の恐怖も知らない。ライオンに追っかけられるシマウマは、殺されて食べられるのを恐れて必死に逃げるが、それは目の前に迫った死の危険を恐れるだけであって、人間のように死の恐怖を味わっているわけではない。人間は動物のように目の前に死の危険が迫らなくても、自分にもやがて死がやってくると想像するだけで、死の恐怖を味わうのである。

人間は時間を発明したとき、時間のなかにいる自我も発明したが、時間は無限（永遠）でありながら自我は有限である、という絶対的な矛盾（自然）を嘆き、恐れるようになった。自我という時間、つまり、自我が生きている時間（だけ）が限りあることに納得できなかったし、恐れを感じたのである。自我ももたず、したがって時間にもかかわらない動物は、その動物種全体の一部として死んでいくにすぎない。一匹の犬は犬全体の生命の一部として生まれ、死んでいくのであって、特定の個体として生まれ、死んでいくわけではない。だから、ある犬が死んでも、別の犬で代替することができる。このことは実は人間にも当てはまる。一人の人間もまた、人間全体の生命の一部として生まれ、死んでいくことには変わりはない。ある人間が死んでも、別の人間で代替することはできる。その点では動物である人間も、犬や猫と全く変わらない。

しかしながら、犬や猫と同じ動物である人間は時間を発明することによって自我を発明した動物であり、そこが犬や猫と決定的に異なっている。なるほど一人の人間もまた、人類種全体の生命の一部として死んでいくが、同時に一個の自我として、その自我が生きた時間として死んでいく。自我は個々人が自分の世界のなかでそれぞれ勝手に作り上げた幻想にほかならないから、人類種全体の生命の一部から切り離されており、ある個人の自我と別の個人の自我とのあいだには何のつながりももたない。それ故に、個人が死に自我が滅びれば、すべてが消え去って、あとになにも残らない。この空虚を恐れて、

人間は自分の死を恐れるのである。いいかえれば、人間は人類のなかの一人として死ぬと同時に、一個の特定の個体として死ぬが、人間は人類のなかの一人として死ぬのではなく、自分だけの時間を生きてきた特別な一人として死ぬことを恐れているのだ。

自分の死を免れえない人間にとっての願望が、永遠なるものに向かうことは避けられない宿命であろう。「永遠なるもの」とはもちろん、自分の死後の世界にほかならない。死後の世界にも自分がいかに生きつづけることができるか、がつねに最大の関心事であった。そこで人間は、神とか国家とか正義とか真理とか家などの永遠の絶対的価値を^{ささ}発明し、その価値に身を捧げ、殉じることによって、自我を永遠なるもの、絶対的なものに放り込み、死の恐怖から逃れようとしてきた。だが、自分の死の恐怖から逃れるために神とか国家と正義などの絶対的なものを発明したとき、それらの絶対的なものは人間に対して、神のために生きるのでもなく、国家や正義のために生きるのでもなく、神や国家や正義のために死ぬことによって、永遠の命を得ることができるかのような幻想をもたらすなかで、人間の死の恐怖を解消しようとしてきたことを忘れてはいけない。

もちろん、神とか国家を信じることによって死の恐怖を克服したわけでもなんでもなく、永遠に生きたいという願望のなかで死に急ぐことによって、死が恐怖ではなくなったただけのことなのだ。別にいえば、死の恐怖から逃れるためにできることといえば、一つは死の恐怖を忘れることであり、もう一つは死ぬことである。死の恐怖を免れえない人間にできることといえば、忘れるか、自分が死ぬ以外にない。生きつづけるかぎり死の恐怖から逃れられないのであれば、そのような自分を打ち消す、つまり、自分が死ねばよいというのは理に適っている。しかし、死の恐怖から逃れたいけれども、自分が死にたくないという気持ちが湧き起こってくるのも、いま生きている人間としては当然である。ではどうすればよいのか。死の恐怖を忘れてしまえばよいのだ。自然には忘れることなどできないから、忘れさせてくれるものを人間はさまざまに発明しようとしてきた。

人間というものは生きているかぎり、どうしたって死の恐怖から逃れられない。人間とはそのようなものだ。だから逃れられないからといって、忘れようとしても簡単に忘れられるものではない。人間が死を恐れるのは、自分が生きてきた時間が突然消えてしまえば、すべてが終わり、あとになにも残らなくなってしまうと想像するからである。自分の死後、「自分が生きてきた時間は一体、どこへ行ってしまうのか」という自問に耐えられなくなるのだ。ここで人間は人間であることをやめて動物になってしまえば、動物と同様に死を恐れなくなるという考えが起こってくる。その動物種全体の生命に組み込まれている動物の生死が、その動物種全体の生命が永遠である限りにおいて永遠であるように、人間もまた、分裂している自分の時間を人類全体の永遠の生命に組み込まれるようになれば、動物と同じく自分の死に恐怖を感じなくなると考えたとしてもおかしくはない。

全自然の生態系の本能において、動物にはもともと自分の死がないから自分の死に対する恐怖もないというありかたに倣って、壊れた人間の本能を人為的に組み立てて人類

全体の永遠の生命のなかに戻してしまえば、そのなかに特定された自分一個の死も解消されて、自分の死に対する恐怖が湧き上ってくる余地はなくなるという考えが、多くの人間を捉えた。人間は自分の時間を生きている存在ではなく、永遠のための時間を生きている存在であり、あるいは自分のための時間でさえもが永遠のための時間と重なっている、と考えられるようになった。つまり、永遠を生きる時間のもとに自分を生きる時間は吸引され、そして自分の死に対する恐怖も永遠を生きる時間のなかに吸引されていくのだ。

自分の死がない動物には自分の死に対する恐怖もない代わりに、永遠という意識も当然ながら、ありえない。すべてにおいてそれ自体であった。自分の死を持った人間が自分の死に対する恐怖を解消するために、有限の時間に対する永遠の時間への憧れとしてこの地上に出現せしめたのが、神とか国家とかの権力装置であり、正義とか真理とかの権力理念にほかならなかった。神が存在するためには人間は神のために生きなければならなかったし、国家が存在するためには人間は国家のために生きなければならなかった。正義のために生きなければ正義はどこにも存在することができなかったから、人間は自分のために生きず、自分のために生きる時間を神や国家のために生きる時間の下位に置いた。

人間が時間を発明すると同時に自分というものを生みだしたとき、人間にとって生は有限であり、死は無限（永遠）となった。人間は自分の生を終えることによってしか、永遠に還ってゆくことはできなかった。つまり、人間は自分の死を体験することができないから、自分の一生の有限がわからないように、自分の死後の永遠についてもわからなかった。ただ他人の死を通じて自分もいつか死ぬだろうと想像するなかでしか、自分の死についても死後の世界の永遠についても思いを馳せることはできなかった。自分が死ぬことも、自分の死を恐れることも、死後の世界というものがあるのかどうか、自分が生きてきた時間というものがどうなってしまうのかも、すべてがいま生きている人間の想像のなかの出来事にすぎなかった。人間の想像の外で自分の生死に立ち会うことのできない人間には、確かなことなどなにひとつありえなかったのだ。

自分の死を体験することのできない人間にも必ず死が訪れるし、初めがあるものには終わりがあるということを経験則において知っている人間の考えには、生が有限であるなら死は永遠であるらしいということが刻印されていた。つまり、人間が時間を発明したということは、自分が生きる時間は有限であり、自分の外にある時間は永遠であることを発明したということである。そんな人間の世界に永遠なるもののかたちをとって神とか国家が、どこにもみえないにもかかわらず、現にそこにあるかのような姿として登場するようになったとき、神や国家は自分の生の時間に属しているものではなく、自分の死後の時間に属していることに注意しなくてはならない。永遠なるものは自分の生につながっていなければ、自分の死につながっているほかないからだ。

だから神や国家のために生きることは、自分のために生きることと両立しがたく、神や国家のために自分を生きる時間を死ななくてはならなくなってしまう。もちろん、神

や国家のなかで自分を生きる時間を死ぬことによって、永遠の時間を生きることになるのだ。神や国家が永遠であるかぎりにおいて。永遠の時間は自分を生きる有限の時間が終了しないかぎり、訪れないという鉄則にそこでは貫かれている。要するに、神や国家は多くの人が自分の命を投げだせば投げだすほど、輝きを増すようになっているのだ。人間が自分の死の恐怖を回避する永遠の装置として、神や国家を発明したとき、結局のところ、その権力装置のなかで死の恐怖を招く自分の時間を死なねばならなくなってしまう。そう、神や国家のなかでは自分を生きる時間を持たなくなることにおいて、人間は生きながら死んでいるように見える。人間が自分の死の恐怖から逃れるためには、やはり現実死ぬか、それとも生きながら神や国家のなかで死ななくてはならないのかもしれない。

時間の痕跡としての労働

人間が労働するようになったのは、過去から未来へと流れゆく時間を押しとどめ、この現在が確かに存在したことの痕跡を残すためである、と岸田秀は説明する。人間は食うために働くようになったと誰でも考えるが、それだけではないということだ。働き蜂のように本能に従って働かなくなった人間が時間を発明したとき、働くことも時間のなかに置かれることになった。それは労働時間としてだけでなく、それ以上に労働の成果のなかに現在の時間を凝縮させて、未来の時間のなかに繰り込む欲求としてあらわれている。土器とか石器とかの必要品や装飾品、記念碑などの労働の成果とは明らかに異なる、生活上なんの役にも立ちそうにない土器や石器などが古代遺跡から数多く出土される事実は、古代の人間が時間を支配する欲求に駆られていたことを物語っていたと思われる。

それらの労働の成果のあるものは交換されていくうちに商品となり、商品はやがて貨幣を生みだし、人間の経済活動が始まるが、人間の労働が発明された時間のなかに置かれていることを考えるなら、もちろん、人間の経済活動も時間の発明によってもたらされた結果の一つにほかならない。労働の成果である土器や石器が、過去の時間が現在において失われていないことを示す証拠品であるように、労働の成果とは異なる貨幣もまた、その証拠品の一つであろう。お金をたくさん貯めてきた人は、過去にお金に人一倍強く執着してきた人であることを物語っている。いや、お金を文化に置き換えれば、なによりも人類の文化そのものが過去の時間を堆積してきたことを示す巨大な証拠品にほかならない。

暦の誕生

社会の成り立ちには暦が不可欠である。時の長さを測らなければならないし、節目の記念日を決めておかなければならないからであり、社会秩序はまず時間の秩序によって規定されねばならない。その時間の秩序の共通な単位として、年、月、日があり、地球の公転が年の長さを決め、月の公転が月の長さを決め、地球の自転が日の長さを決めている。1年は正確には365日5時間48分46...秒と割り切れないように、月も同様に29日12時間44分3...秒で割り切れない。合理性を求める人間が非合理的な自然を相手にさんざん苦労した挙句、折り合いをつけて出来上がったのが暦であるが、15世紀に地

動説を提唱したコペルニクス以前と以後（というより、彼の死後、地動説が公認されるようになった以前と以後）の暦の決定的な相違について、よく注意しなければならない。

『世界全史』（講談社）に書きとめられている最古の暦の記述としては、紀元前3千年頃のエジプト初期王朝時代に、ヒエログリフ（聖刻文字）と並んで民衆暦が生まれたとされている。この暦は1年を365日としており、毎年繰り返されるナイル川の定期的増水の長年にわたる観測に基づいていた。増水の開始の日から次の年の増水の日までの日数を数え、経験的に365日という数を割り出したのである。そのため、厳密には太陽暦といえなかったが、民衆暦の1年は30日の月が12ヵ月と、どの月にも属さない5日とからなっており、^{うるう}閏年は採用されなかった。実際の季節とのズレが生じて、エジプト人はかまわずこの暦を使いつづけた。紀元前46年にローマのユリウス＝カエサル（シーザー）が、従来の月の運行に合わせた太陰暦に代えて、エジプト起源の太陽暦を導入して定めたのが、ユリウス暦である。

ユリウス暦は途中で変更されたために、初めは3月から始まったとされる。カエサルは学者の意見を取り入れて、1年を365と1/4と決めた。4年に1度閏年をおくか、端数は最後の月の2月に押し付けられた。現世に対して無縁で無関心であった初期のキリスト教が、教義を確立する4世紀頃からしだいに現世のすべてを覆いはじめ、やがてこの世のすべてが時間も空間もキリストによって支配されているという観念が生じた。ローマがキリスト教国家になると、暦は隅々までキリスト教で色づけられていく。民間信仰で冬至として尊ばれていた12月25日がイエスの誕生日とされ、春の到来が復活祭となった。

キリスト教で色づけられたのは暦だけではなく、イエスの誕生をもって起源の始まりとしようとする考えによって、西暦が生みだされた。それまで人は現世の年代を記録するのに、ローマ紀元かユダヤ教の聖書紀元に拠っており、たとえばユダヤ教の聖書紀元では、世界の始まりから数えるという建て前であったが、世界がいつ創造されたのかについて、当時のキリスト教徒の考えはバラバラで、しだいにわからないものとされるようになったその上に、イエスの誕生に基づくキリスト教紀元が設定されたことによって、イエスの生誕以降が「西暦」となり、生誕以前が「紀元前」とされるようになっていった。もっともイエスが生まれたのは紀元前6年から4年頃という現在の学界の定説からすれば、設定されたキリスト教紀元とイエスの誕生との間にもズレが生じていただけでなく、西暦が社会的に定着するようになったのは6世紀頃といわれ、また紀元前という捉え方は長らく存在せず、紀元前という使い方が一般的になるのは17世紀になってからとされる。

ユリウス暦の矛盾は年々蓄積されていき、16世紀になると冬の寒い時期に春分がやってくることになったので、カトリック社会の学者たちの指摘によって教皇のグレゴリウス13世が音頭を取って、1582年にユリウス暦が廃止され、グレゴリウス暦が成立した。4年に1回とされていた閏年を、400年毎に3回減らすことによって、1年の平均日数は365.2425となり、太陽年に近くなった。カトリック国では早く普

及したが、宗教対立のためにプロテスタント国では採用は遅かった。正教国ではもっと遅れて20世紀に入ってから多くの国が多く、日本での新暦としての採用は1873年だから、ヨーロッパ以外では早い方といえる。紀元元年は正確にはイエスの生まれた年ではないということから、暦をキリスト教から切り離そうとする試みもあるらしい。

地球の公転周期の年と、月の公転周期の月と、地球の自転周期の日という、それぞれの単位のあいだに整除関係がないことや、人間が作った時計で測ったそれぞれの時間が一定でないことを含めて、暦に合理性を求めていくことはなかなか困難であり、暦を作ることによって人間は、この恐ろしく無秩序な宇宙に毎年毎年変わらぬ規則正しい一定した循環のリズムを持ち込もうとしてきたのだ。つまり、地球での人間の存在のリズムを宇宙のリズムにまで重ねて把握しようとする、情熱的で合理性追求の欲求に駆られていたといえるかもしれない。エジプト暦、ユリウス暦、グレゴリウス暦以外に、マヤの二種類の暦、ユダヤ暦、中国暦、イスラム暦などの、多くの特長のある暦があるが、なかでもフランス革命時代に作られた革命暦は、徹底した合理主義のために長く続かず、その敗北の歴史まで美しく感じられる。

昔の日本の暦

1873(明治6)年の太陽暦採用以前の日本では、旧暦(太陰暦)が中心であった。陰暦は月に合わせたものであり、月の朔(見えない日)から朔までは29日半ほどだったから、一月は必ず29日か30日であった。30日の月は「大の月」と呼ばれ、29日の日は「小の月」と呼ばれた。いまの暦では30日と31日の月は必ず決まっているが、陰暦では「大の月」がどの月で、「小の月」がどの月かは決まっておらず、毎年違った。したがって、昔の12月は年によって異なり、29日のときもあれば30日のときもあった。100年先のカレンダーでもすぐ作れるいまの暦のようなわけにはいかず、昔の暦は太陽と月の両方を見て作る複雑なもので、来年のカレンダーにしても、閏月があるのかないのか、あるならいつなのか、大の月と小の月の配列など、幕府の天文方の学者たちにしかわからなかった。

閏月が必要なのは以下の理由による。月の一月は29日半、一年12ヵ月では354日になるが、太陽の1年は365日と6時間弱である。年は太陽に合わせないと季節が狂うので、月の1年と太陽の1年の差である11日をなんとかしなければならなかった。2年たつと22日も不足するから、そこで3年弱に一度、つまり19年に7度閏月を入れて調整することにした。この閏月の入れかたがむずかしく、説明はもっとむずかしくなるので省略するが、たとえばホンモノの4月にホンモノでない4月が続くことがあり、そのホンモノでない4月のほうを閏4月としたために、「閏」には「ホンモノでない」という意味が生じた。だから昔は3年に一度ほど、一年13ヵ月という長い年ができた。このように日本の昔の暦と西暦とは、年の変わり月も1年の日数も違い、月数も時々違ってくるし、1月の日数も違うから、「文久2年(1862)11月2日」といった記

載の仕方が、いかに間違っているか、という指摘には十分な根拠があるといえる。

ところで、時計をもたない昔の人たちはどうやって時刻を知ったのだろうか。「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」の冒頭の一文でよく知られる『奥の細道』に、「古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」と書いた江戸時代の芭蕉はたとえば、旅をしながら、どのようにして時刻を知ったのだろう。

「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」という最後の句を残して、1694（元禄7）年、大坂の旅先の宿で亡くなった芭蕉の『奥の細道』は、いわゆる「旅日記」ではないが、随行していた曾良という人物が「曾良旅日記」を残してくれているので、彼らの日々の行動が詳しく読み取れる。たとえば、「一 十八日 卯刻、地震ス。辰ノ上刻、雨止。午ノ刻、高久角左衛門宿ヲ立。暫有テ快晴ス。……未ノ下刻、湯本五左衛門方へ着」という、1689（元禄2）年4月、那須の殺生石を見に行った前日の一節に立ち会ってみよう。

「刻」は時刻の「刻」と同じである。当時は、季節によって時間が異なる日の出と日の入りを基軸に時間を刻む不定時法だったので、現在の定時法に即して厳密な換算はできないが、あえて現代の時間に直せばこうなる。午前6時（卯刻）、午前7時（辰ノ上刻）、正午（午ノ刻）、午後3時（未ノ下刻）。不定時法といっても不正確だったわけではなく、曾良はどうやって正確に時刻を知ることができたのだろう。当時の文献に懐中時計に触れた記述があることからすれば、曾良が懐中時計を持っていなかったとはいいいきれない。懐中時計といっても、それは日時計だったかもしれないが、しかし、それなら雨の日には役に立たない。西欧の機械式時計などに頼らなくとも、当時の日本人には寺の鐘などの公共的時報によって、時刻を知ることができた。芭蕉と曾良が旅したのは、芭蕉が「花の雲 鐘は上野か 浅草か」と詠んだ江戸の町中ではなかったが、元禄の日本の隅々には寺があったから、寺の鐘はどこでも定刻に鳴り響いていたのである。

腕時計の誕生

携帯時計やPHSの普及で腕時計を必要としない人々もみるようになったが、まだ多くの人々は腕時計を習慣として、あるいはファッションとして身に帯びている。実用的なデジタル・クォーツや一時大流行したスウォッチと呼ばれる、若者向けの派手な色彩のプラスチック製腕時計や、成り金趣味的なところでは、某ロレックスの金ピカなのやパティック・フィリップの究極の宝石腕時計など、さまざまな腕時計が日々活躍しているにちがいない。デジタルに押されていたアナログが数年前から人気を集めているという。クォーツ式ではなく、ゼンマイと歯車で時を刻む腕時計で、それも価格20～30万円の高級品がよく出て、世界的現象らしい。性能の完璧なクォーツよりも、少々ズレてもメカがいいというアナログ気分にはひかれるらしいが、問題はそれを作る技術者がいなくなってしまったことだという。

グローバリゼーションが進むほど、手間暇かけて作る製品が目を引くのは当然であり、

そこでは職人芸がモノをいう。デジタル（モノの製品開発）は追い抜くのが早い分、追いつかれるのも早く、時間の短縮競争のなかに消費者も放り込まれて、めまぐるしさから逃げだしたい気分なのだ。そこでは消費者は選択しているのではなく、選択させられているのであり、買うのではなく、買わされているのである。自分の所有している時間が誰かに勝手にプログラムされ、細切れにされ、奪われているような喪失感にたえず付きまとい、グローバリゼーションが促す変化のスピードと共に画一化による時間短縮と、豊潤な時間に育まれた文化形成の放棄に対する不安と反撥がアナログ気分には漂っているのが感じられる。もちろん、時間のデジタル管理は時計が発明され、その時計が腕時計として人体に取り付けられて、時間の管理を人間ではなく腕時計が行うようになったときから、見通されていたといえなくはなかった。

腕時計の起源については、世界の有名時計メーカーがそれぞれに自己宣伝としての「起源伝説」を主張しているが、最大の伝説は「腕時計はポーア戦争中に英国人将校が、懐中時計を体に密着させるために改良したのがはじまり」というものであり、1899年のポーア戦争から帰還した兵士たちが、腕時計を社会に広めたとされる。しかし、『腕時計の誕生 - 女と戦士たちのサイボーグ・ファッション史』（永瀬唯）によれば、腕時計の起源は実際には、それ以前の1880年のドイツ軍にまで遡ることができる。腕時計の普及は戦争と深い関係があり、距離を隔てた複数の地点から、タイミングを合わせて敵に対する一斉攻撃を基本にする近代戦を可能にしたのは、交通・通信技術きたしらかわのみやよしひさの発展と腕時計の普及だった。日本で最初期に腕時計を使用した人物として北白川宮能久親王の名前が出てくるのは、陸軍時代の写真で確認されるから、という。

腕時計が日本の大衆に普及したのは、ポーア戦争と同時期に中国を揺るがした義和団の乱（1900年）の頃である。当時の日本軍の装備は列強のなかでもかなり先進的で、「日本兵は伍長でさえも腕時計・羅針儀・双眼鏡を携帯している」との記述もあり、日露戦争後には更に急速に普及したという。軍装としての腕時計だけでなく、女性解放にも腕時計は寄与した。以前からあった装飾品としてのウォッチ・ブレスレットから、近代的なリストウォッチ（腕時計）への転換によって、腕時計は自転車に乗り、スポーツをする女性の新たなシンボルとなった。

この1900年、人体に最も密着した機械として、若者は腕時計を「人間・機械間のインターフェース」と規定する。20世紀の覇権を競った社会主義と資本主義は、工場労働の合理化や社会システムの均質化を推進し、人間のロボット化を大量発生させてきた点では同質のイデオロギーであり、「戦争起源の腕時計」は自分以外の誰かによって常に計られていることにおいて、人間管理を象徴している。

遅刻の発生

時計の誕生、とりわけ腕時計の誕生によって、人間に「時間厳守」の意識が生みだされ、それは当然、「遅刻」の意識をも生みだすことになった。前述したように、江戸時

代では日の出（明け六ツ）と日の入り（暮れ六ツ）を基準にした不定時法であったから、人々は半時（1時間）くらいを基準にして暮らしていた。この時代の人々の時間意識は、「点」ではなく「帯」であったから、朝五ツの集まりを約束していても、それは30分から1時間ほどの時間帯のうちのどこかという意味であって、何時何分にみんなが同じ場所にピタリと集まること自体が不可能であり、誰も最初からそんなことを考えていなかった。分や秒の意識のない江戸時代の人々は時間の「帯」のなかで、のんびりとおおらかにたゆたっていたのだ。こうした人々に、しかも時計がまだ普及していない明治初期に、「時間厳守」の意識を植え付けるには、かなり強引な方法が用いられたであろう。

鉄道や工場や学校などで近代の時間意識が叩き込まれ、ジャーナリズムや生活改善運動の現場などできめ細かにしつけられた。半鐘や汽笛や太鼓などの古い道具を利用したり、減給や居残りや駅からの締め出しといった罰則規定を設けたり、「時は金なり」の啓蒙を広めたりといった工夫を積み重ねることによって、日本人の心身に「遅刻は甚だよからぬことなり」という観念がしだいに定着していった。それでも人々の意識に定着するまでには長い時間が必要だったらしく、昭和の初め頃まではまだ、日本人の自然は「点」としての時間になじめずにいたらしい。明治20（1887）年で世帯での普及率が8%にすぎなかった柱時計が、7割を超えるようになるのは20年後であった。したがって、西暦が明治6（1873）年に採用されても、政府は明治42（1909）年まで官暦に旧暦併記をしているという事実があった。長年の年中行事がすべて旧暦に沿って行われてきていたためである。

お盆は旧暦7月15日だが、西暦では夏真っ盛りで、地方では農繁期のため先祖供養などは無理であった。旧暦併記がなくなると、正確に旧暦の日付を見つけられなくなり、「1か月遅れの8月15日のお盆」が生まれることになった。近代化は、季節感などの日本人の感性の領域にまで大きな変化を生じさせたのである。しかし、それ以上に近代化によって、30分から1時間ほどの時間の「帯」のなかで暮らしてきた日本人が、分や秒単位で分割された「点」としての時間につなぎとめられるようになってしまったことのほうが、大激変であったにちがいない。この「点」としての時間は、いくつかの戦争と経済成長を人々が通過するなかで確立していった。

時間が「点」になれば、そこに「時間厳守」の意識が生まれ、時間に対してせっちな人とルーズな人があらわれてくる。『あなたはどれだけ待てますか』のなかで、ロバート・レヴィーン博士は「せっかち度」を測る項目として次のように列記する。街中で人々が歩く速さ 郵便局員が切手を1枚販売するのに要する時間 銀行にかかっている時計の正確さ、の三点であり、調査31ヵ国中、日本はスイス、アイルランド、ドイツに次ぐ4位だが、切手を小袋に入れたり、領収書を用意するなどのサービス行為を所要時間から差し引くと、日本が事実上トップだと付け加えている。博士の分析では、経済状態が健全で、工業化率が高く、人口規模が大きく、個人主義的な価値観が強い国ほ

ど、要するに、成熟度が高い社会ほど、せっかち度が高い。だがせっかち度が高くなると、生活満足度と共に心臓発作の発症率も高くなるが、日本は例外で、適度な日本式仕事中毒、集団主義、義理を尊重する社会がストレスを緩和していることで、心臓発作は少なく、日本人は上手に「せっかち」な時間と「のんびり」時間を使い分けている、と評価される。

「せっかち」と「のんびり」の使い分けといえば聞こえはよいが、「のんびり」時間は遅刻の常習という現象をもたらしているように見える。『ダカーポ』（01・3・21）は「時間を守らない人が増えた？」という記事で、《実に悪びれずに取材に遅刻してきた》1人の若者を取り上げている。《遅刻暦は小学校5年までさかのぼる。最初の1か月は注意を受けていたが、だんだんと先生もあきらめるようになり、中学・高校も同じ道を歩いていく。この遅刻を繰り返し、周囲からとがめられなくなるというのは時間を守らない人の共通経験として目立つ。そして今や遅刻癖はN君の「責められない」キャラクターとして周囲から認知されるようにまでなった。》バイトは遅刻しないというN君に典型的だが、《仕事等の公的な時間は厳守できるのに、私的な友人との待ち合わせは遅れても平気というのも、時間を守らない人たちの大きな共通項だ。》

遅刻することに罪悪感はないのかを訊くと、「たとえば自分の遅刻のせいで映画や電車の時間に間に合わなかったら悪いと思うけど、その後特別な用事がなければ迷惑かけてるわけじゃないし」「だって友だちも遅れますよ普段。だからイーブンだと思うし。それに大勢で集まれば遅れるヤツが必ずいるんだから、自分だけ早く行っても仕方ないでしょ？」（27歳・男性／旅行代理店）

「悪いとは思いますが、10分ぐらいでは思わない」（21歳・女性／学生）

「罪悪感というより自己嫌悪はある」（27歳・女性／デザイン関係）

「ない。時間以外の約束は守っているから、それだけで人格を否定されるのはおかしい」（28歳・男性／情報通信会社）

「朝弱いし、家は郊外だし、先天的に遅れる資質がそろってる。これはもう仕方がない」（28歳・男性／自由業）

「家を出ようとするとなにか誰か尋ねてきたり電車が遅れたりする。見えない何か、僕を遅刻させているんですよ」（前出・N君）

「待つヤツは待つのが好きなんだから、待たせればいい」（前出・27歳・男性）

記事は、取材に遅れてすいませんを連発して入室してきた、17歳の女性の次の言葉を最後に載せている。「わたし仕事も友達も何時間遅刻してもされても平気な人だったんですよー。怒られても別にいいやーって。その場限りでしか考えてなかったんです。そうしたらモデルの仕事がなくなっちゃって、悩んだら遅刻で信用失ったんだなー、みんなに迷惑かけてたんだなーって反省しました。それから仕事は元に戻るように、遅れないように頑張ってます。他人の遅刻にもうるさくなりました」

2005年8月31日記